

## 東は東、西は西？

—A *Passage to India* のテーマについて—

上 野 直 蔵

「異った二つの culture が真に理解し合い、愛し合うことが可能であろうか。」西洋と東洋とは真に融合することができるであろうか。Rudyard Kipling (1865-1936) はすでに「東は東、西は西、両者相会うことはなかるべし」と詠ったが、その彼は正真正銘の英国帝国主義支持者であった。彼の著名の詩 *The Recessional* で彼は“Lest we forget”という refrain を使っているが、その意味は「われわれは強国ではあるが、神を忘れてはならない」という英国国民にたいする自戒の言葉であるにせよ、あくまでも英国国民は強者であるという無意識の前提に立っていわれたものであるから、強者にたいする自戒の言葉であることには間違いない。もし、当時、印度人が「自分たちは謙遜でなければならない」という詩を書いたとしたら、彼は笑殺したことであろう。Pierre Loti (1850-1923) の書いた数々の日本の印象、有名な「お菊さん」(*Madame Chrysanthème*) 物語は西洋人が東洋を見る態度としては、愛情のある方であるが、これとても根底には「自分の理解できない珍らしい、可愛いもの」を観察しているという気持ちがうかがわれる。決して、日本人を自分たちと対等のものとしてみている態度ではない。私はこの物語を思うにつけ、よく「枕草子」にある宮中の女官が翁丸という犬を可愛がって、この犬が涙を流したとかいって「哀れみ深く、感に耐えて」いた話を思い出すほどである。

Culture の異った場合、どの程度までの理解が相互に可能なのであろうか、というテーマは西洋と東洋との場合ばかりでなく、同じ西洋という大

きなカテゴリーの中でも起り得ることである。たとえば、アメリカという culture と、ヨーロッパという culture との間にもこの問題は起り得るのである。Henry James (1843-1916) はこの問題をテーマとした幾つかのすぐれた作品を残している。アメリカとヨーロッパの culture の相違は Henry James の大きな関心事の一つで——もっとも大きな関心事であったともいえよう——あった。彼の考えるところによれば、単純で一つの moral standard しかもたない puritanical なアメリカ人は真の人生の enjoyment を知らない人種であって、彼らアメリカ人は複雑で、multiple moral standard をもつヨーロッパの culture を容易に理解することはできない。もし理解することができ、この難解なヨーロッパ人心理の正体をつかむことができて、それは所詮、他所者として理解するにすぎないのであって、彼ら自身がヨーロッパ人になりきることは不可能である。犬に生れたものは猫になることはできない——これが Henry James の *The Ambassadors* のテーマであり、このような結論に Henry James が到達したとき、James の心中にはアメリカの culture よりもヨーロッパの culture の方を一段高く評価し、ヨーロッパの culture の方を愛する心持があったことは否めない。アメリカの culture をヨーロッパの culture よりも低いとする見方は一般のアメリカ人のもつ気持である。Sinclair Lewis (1885-1951) もこの劣等感になやまされながらも、しかも Henry James とは異って、彼は「それでも私はアメリカを愛する。アメリカ人よ、誇りをもて。」とその小説において呼びかけた人である。

E. M. Forster (1879- ) の *A Passage to India* (1924) は culture の理解をテーマにしている点で、また、心理的である点で Henry James に似ている。もっとも Forster は James ほどの深い内面的な掘り下げはなく、従って James がもつような parenthesis の多い、暗示にみちた複雑な表現をすることはできなかったし、また、Henry James ほどの強い restraint の力をもっていなかったから、その文章は時として空や星などの

自然物を image に使った stock expression による表現過剰をみせている。

小説はすべて conflict をそのテーマとして扱う。この葛藤は歴史小説の場合のようにものとの conflict でもよい。力と力との conflict でもよい。近代の小説は心理の conflict を扱うことが多い。その最も典型的なものの一つは Henry James の小説であろう。そこでは人物の身の上には何か起る。それが池中に小石を投げこんだように、その人物の心の中に波紋を生じる。どのようにしてその波紋が起り、どのような形をその波紋がとるか。それらが叙述され、次に最も大切なこと——その波紋が消えた時、その人物の心の中はどのような変化変貌をとげているか——が述べられるのである。何故となれば、人間の心の中は池の水と異って、波紋が起る前の状態と、起った後の状態とは異なるからである。つまり、その人物は、この conflict の結果として別の新しい心的状態に到着するからである。それが以前の状態よりは成長した、よい状態に至ったか、或は以前よりは退化した、悪い状態に達するか、これは作品によってさまざまである。Henry James の小説の場合は各人物は結果として、それだけ目覚め、賢明になっている。その経験によって人間的成長をとげたのである。これに反して、Theodore Dreiser (1871-1945) の作品やその他の naturalism ないしは realism の小説では出来事とその人物の生来もっていた弱さを引き出し、その経験の結果として、その人物は deteriorate することが多い。

*A Passage to India* では、この conflict を起させる外的な事件は Marabar Caves において、英国女性の Adela Quested が印度人医師 Aziz におそわれ、暴行されかけた、と誤解されたことである。この出来事をめぐって、英国人の中で、誰と誰とが、どのような態度をとったか、また、この出来事が Aziz の無罪ということで結末をつげたとき、Aziz の心の中に、その後どのような変化が起ったか。関係英国人たちの中で、どのような変化が起ったのであろうかを、この小説は述べている。

Aziz, Fielding, Adela, Mrs Moore, Ronny, Godbole などという個々人を扱いながら、同時にこの小説はこれらの人物に普遍的な性格をあたえ、先にのべたように、これらを二つの異った culture に属する人々の相互理解と、愛情の限界と可能性を現わそうとしたものである。すなわち、西洋を代表する側としては、Adela Quested, Ronny Heaslop, Cyril Fielding, Mrs Moore, Miss Derek, McBryde 夫妻, Major Callendar, Turton 夫妻、および第三部に現われれる Ralph Moore と Stella Moore 等であり、他方、東洋を代表する側としては Aziz, Godbole, Hamidullah 等がいる。

上述の西洋側——この場合は英国人側——の態度を五つに分けることができよう。すなわち、Ronny Heaslop, Miss Derek, The McBrydes, Major Callendar, the Turtons 等によって代表される対印度の姿勢が一つのカテゴリー、Adela Quested の印度にたいする姿勢がその二であり、その三の姿勢は Fielding のそれ、Mrs Moore の姿勢をその四とみるべく、最後の第五のものとして第三部においてチョット顔出しする若い姉弟 Stella と Ralph がこれまた一つのカテゴリーを示している。このように西洋側の五つの姿勢、態度が一方にあり、他方、東洋側には Aziz によって代表される態度と、Godbole によって代表される態度がある。これら双方からむものとして宗教の相違がある。すなわち西洋側のもっているキリスト教と、東洋側のもっているヒンズー教と回々教とであるから、物語の構成としては、キリスト教、ヒンズー教、回々教という三要素をふまえて織りなされた culture の相互関係であり西洋側の五つの態度と東洋側の二つの態度との impact を扱ったものと言うことができる。そうして物語は主に Aziz の point of view で語られているが、Fielding, Mrs Moore, Godbloe, Hamidullah 等の観点も多少入りこみ、さらに作者の comment も相当に多い。

ここで西洋側の五つの態度をみることにしよう。

(1) Ronny Heaslop, Miss Derek, The McBrydes, Major Callendar, The Turtons によって現わされるもの。

このグループは印度人を軽蔑しきっている。いわゆる Anglo-Indian (在印英国人) である彼らは印度に「印度人をよろこばすために来ているのではなく、このいやな国を力によって治めるために来ている」のである(Ronny の言葉, p. 50)。彼らに言わせれば印度人は無智、無能力である。印度人の行動の一つ一つには、その裏によからぬ意図があると考えている。例としてあげれば、Aziz が Mrs Moore にたいして Major Callendar を非難する。Mrs Moore は不用意にそれを Ronny に告げる。Ronny はさっそくそれを Major Callendar に告げねばならないという。彼に言わせると、Aziz は Mrs Moore にたいして自分のえらさ加減を誇示するために Callendar の悪口を言ったか、または「点数をかせぐために」いったに相違ない、と考える。(p. 33) また、Aziz ははじめて Fielding にあった時、彼の友好的な態度に心うたれて Aziz らしい情熱的な衝動にかられてカラーの後どめボタン、それも純金の品ものを Fielding にあたえてしまう。そのために彼自身のカラーは止らなくなってしまう。後でこれを見た Ronny は「Aziz はネクタイピンからスパッツまで、キチット非の打ちどころなくつけていたが、後のカラーの止めボタンを忘れていた。いや実に印度人らしいことだ。小さなところをなおざりにする。この人種特有の基本的なズボラだ。」(p. 80) と事情も知らずに酷評する。ブリッジ・パーティーでは印度人と英国人とは別々のところに陣どって、決してお互に話し合うことがない。英国人は印度人を知ろうともしない。

この小説は印度独立の前に、すなわち1924年に書かれたものであることは記憶しておくべき事実であるが、何れにしても統治者としての西欧側の非寛容性の代表的態度であり、正義の裁きをして行政官としては良吏である Turton 長官もこの古い支配者としての対印度観からまぬがれることは

できなかった。しかし、*A Passage to India* ではこれらの人々は Adela, Fielding, Mrs Moore の態度を一そうきわ立たせるための background にすぎなくて、作者はもとより彼らを hopeless case として扱って問題にはしていないし、story を通じて彼らの態度には何らの発展も見られない。

(2) 次に問題とすべきは Adela Quested の態度である。彼女は Mrs Moore の初婚の息子である Ronny と結婚することを目的とする交際のために Mrs Moore につれられて印度にきたのである。彼女は印度にたいして先入観も偏見も持たずにやって来た。彼女は印度人と友人になろうとしてやって来た。それにもかかわらず、結果において彼女は失敗している。何故だろうか。この疑問をとくカギは、彼女の “I want to see the real India.” (p. 25) という言葉にかくされている。この言葉にたいして Anglo-Indian の夫人たちは「まァ、印度を知りたいなんて」と Adela を酔狂者扱いにするのであるが、別の意味において Adela のこの言葉は彼女の limitation を示すものである。というのは、“I want to see the real India.” という言葉は、若い、気負ったインテリらしい言葉で、まるで「英語独習四週間」とか「ドイツ語を二週間でマスターする近道」とかいう書物のうたい文句と同意異曲である。そこには北垣氏の指摘するように西洋的合理主義の態度がうかがわれ、知的な理解があれば、すべての物事が解決する、という考え方がひそんでいる。本当に印度を自分たちと対等の culture をもつものと考えたり、また、印度を愛したりするものには、このような気負った態度をもってやってくることはないのである。しかも彼女は自分が印度を見ることによって、全印度を理解できる、という自己の能力にたいする過信がある。しかし少なくとも彼女は印度を知ろうという良き意図をもっていただけ認めなければならない。

(3) これに反して、Mrs Moore の態度はもっと深くキリスト教の愛に根ざしたものである。彼女は Mosque で Aziz と最初に出遇ったときか

ら、他教の神をもうやまう態度をみせ、その人柄の温かさで Aziz を魅了する。彼女は Ronny の偏狭な態度に心をなやませ、Ronny に「あなたは自分を神さまだと思っているのか」と責め、「印度はこの地上の一部です。そして神はわたしたちがお互に仲よくするようにと、この地上にわたしたちを住ましめ給うたのです。神は——愛です...わたしたちが隣人を愛するようにと、その隣人愛を示すようにと、地上に住まわしめ給うたのです。神はどこでもお見通しですから、わたしたちが印度でそれを行っているかどうかご存じです。」(p. 51) と彼女はいう。彼女は蜂にさえも “pretty dear” と呼びかける。この彼女のキリスト教の愛は最後に敗北している。その敗北とは、彼女が Aziz の無罪を信じながらも、それを世間に向けて公表する勇気をもっていなかったことを指すのではない。彼女の敗北はそれよりもずっと以前に起った。それは Marabar Caves で起った。

印度にたいして一応あたたかい友好的な態度をもっている Adela および Mrs Moore の愛が Marabar Caves において試練にあうことは極めて深い意味がある。Marabar Caves は彼らの印度観を試す場として、symbolical な意味をもっている。普通の場所においては英国人と印度人とは、その間に幾らかの空間をおいて接することができる。Mosque においてさえも Mrs Moore と Aziz との間には 1, 2 メートルの空間があったであろう。まして bridge party で相会するときは英国夫人たちは印度人とテニス・コートをはさんで対陣することができる。住居にあっては、Chandrapore の英国人は山手の広大な邸宅に居をかまえ、下町のゴミゴミした地区に住居をもつ印度人とは一マイルも離れていることであろう。であるから、いくら親印英国人でも本当の test にあうことはない。ところが直径 5 マイル位の Caves に印度人と一しょに、しかも暗黒の中に入ったとき、Adela と Mrs Moore とは本当の test にあったのである。そうして彼らは敗北したのである。というのは、彼らが真実に印度人を信じきっていないことが明らかになったからである。Mrs Moore の場合は洞

穴の暗やみの中に立っていたとき、後から後からと、印度人の男女、子供が入りこんできた。そのとき彼女をおそったのは恐怖と嫌悪とであった。彼女は Aziz のように西洋化した知的印度人を愛することはできたが、印度の複雑多岐な、汚濁と多産と、滑けいと悲哀とのすがたに皮膚で接したとき、圧倒され、恐怖を感じた。ここに彼女のもつキリスト教の愛の限界があった。彼女の隣人愛は汚い印度庶民にまで及ぼすものではなかった。彼女をおそった本能的嫌悪感は彼女の隣人愛よりも更に強いものであった。印度は彼女の理解を超えていた。

このように試練の場で彼女は敗北した。その敗北は彼女以外の誰も目撃していなかったし、知りもしなかった。けれども彼女自身が最もよく自らの敗北を知っていた。そのために彼女はすっかり心理的崩壊の状態となり、も早 Ronny を非難する気力もなく、Aziz の無罪を信じながら、それを主張する気力もなく、本国に帰る途中、印度洋上の船中で死ぬのである。この点で彼女のキリスト教の愛は、その能力に限界があるにせよ、少くとも自己の敗北を感じる能力と、罪障意識とを強くもっていたといえよう。

Adela の場合、彼女自身は洞穴で起ったことについて、それが自らの敗北であるとはあまり気づいていない。しかし、彼女がその根底において、Aziz を信用していないこと、ひいては印度人を信用していないことを洞穴の出来事は示してくれている。もし彼女が Aziz でなくて英国人と一しょに洞穴に入ったなら、いくら彼女が突然、誰かに引っぱられたような衝撃をうけても、それが「暴行」という考え方に結びつかず、panic の状態にはならなかったであろう。彼女は印度を少なくとも理解しようと思ったが、印度を真実には信じていなかった。そこに彼女の限界があった。

(4) 次は Fielding の態度である。彼は40歳を過ぎてから印度に住むようになった中年の英国人で、Chandrapore の公立大学の学長である。彼は少しも人種的差別偏見をもっていない。印度人とも自由に交際し、むしろ

ろ堅く、るしく偏狭な英国人との交際よりも印度人との交際を好むゆえに英国人——特に英国婦人たち——から異端視されている。その理由はといえば、英国人は英国人同志で結束していねばならないので、印度人と交際するのは、もっての他だと在印英国婦人たちは考えていたからである。(pp. 61—3) 彼は遠慮のない英国人批評をしすぎる。社交礼儀を守らない。「白人といっても本当に白いのではない。ピンクがかった灰色ですよ。」とある白人をつかまえて言ったことで反感をかう。彼は Marabar Caves の事件が起きたときに、あくまでも Aziz の無罪を信じ、在印英国人たちを敵にまわしてまでも Aziz をかばう。

このように印度人にたいして一視同仁の態度をもつ Fielding ですら、第三部では Aziz の信頼をつなぎとめることができない。Caves の事件から二年後に Mau のヒンズーの祭典で再会した彼と Aziz とは依然として友人ではあるにしても、所詮、東は東、西は西、この二つの culture が相合うことはないのである、という結論を生み出しているにすぎない。何故であろうか。

Fielding が何故真の東西両 culture のかけ橋になりえなかったか、ということについて、作者は明確な回答を与えていない。しかし、所々にヒントになる言葉を残している。それらをひろってみよう。

彼は無神論者であった。その行動は humanist であるが、humanist の愛には又その限界がある。humanist の愛は、たとえば第三部のヒンズーの愛にくらべたときに、その深さと包容力とにおいて劣るものである。彼は自分の妻の Stella とその弟 Ralph を指して「彼らは何物かを求めている。妻と一しょにいと、まるで自分は半死人、半盲人であるような気がする。妻は何か知らんが求めている。われわれ(君[Aziz]や Miss Quested やわたしは何も求めていない)はのろのろとしか進まないが、妻はちがう。」(p. 313) という。すなわち、Stella や Ralph は本質的に Fielding や Aziz とは異うというのである。どのように異なるかということについて

作者は明言はしていないが、作の内容はそのヒントを与えている。この点については次に Stella と Ralph を論ずるところに譲りたい。ともかくも Fielding は真に東西のかけ橋となる資格をもっていない。一つには上述のように、彼には何か欠けたところがあり、humanist にすぎず、また、今一つには彼は印度を真に愛し、理解するには年老いすぎている、という点も考えねばならない。Chapter 32にはそれが暗示されている。彼は印度人 Aziz が好きであったが、やはり休暇で英国に帰ったとき、地中海の優雅な風物に接すると、ボスホラス海峡以西のものはノーマルで、以東のものはノーマルではない、と感じ、英国の六月の野の桜草やきんぼうげを見ると、自分の心の中には枯渇してしまったと思っていた柔しいロマンティックな気持が復活するのをおぼえるのである。要するに彼には英国人の根性が深く沈澱しすぎていたのである。さらに、Aziz との友情の阻ごは一つには Aziz の誤解によるものである。Aziz は Fielding が彼に Adela にたいして慰謝料をとってはいけない、というのを誤解して、それは Fielding が Adela と結婚したいからであろう。そのためには彼女が少しでも金持ちであってほしいからであろう、と邪推する。Fielding の欠点は、この感情的な印度人が激情をみせたときに、彼自らもカットなって対応してしまうところにある。彼は Aziz が本当は金銭にたいしては実に淡泊であること (p. 274) を知らなかった。Aziz が慰謝料に固執したのは実のところ彼が怒りの情にかられて、Adela に復讐したくて言ったのであることを理解しなかったのである。このようにして、善良ではあるが、あまり賢明でない humanist である Fielding もまた culture の橋渡しにはなりえなかったのである。

(5) この小説は「二つの culture が愛し合うことができるか」という問いかけにたいして、印度の空も地も、山も馬も「否」という答えを出しているところで終わっている。「まだ、時は来ない」(No. Not yet) であり、空は「そこでは駄目だ」(No, not there.) といっている。この Not yet

であり、not *there* であることは意味深いことで、何時かの未来において、この大地のどこかで、それが可能であることを言外に含めている。そして将来、yes という答えができることを暗示しているのが、若い世代に属する Stella と Ralph である。この二人については、第三部に少しばかり述べられているばかりで、われわれはほとんど知る余地がないが、その僅かの言及の中からも多くの hint をつかむことができる。先ず彼らは Fielding にいわせると「われわれとちがって何かを求めている人たち」である。彼らは Adela のように「印度をみたい」などと公言する気負った態度の持ち主ではない。彼らは淡々と、ごく自然の態度で印度にきてヒンズー教が好きだという。高い culture が低い culture を視察するなどという態度ではない。静かな、落ちついた態度であり、若く、flexible であることが察しられる。また Ralph は、Fielding のように、印度人が感情的に意地悪の態度を見せても、カットなって、それに反ばつしたりすることはない。Ralph が蜂に刺された。Aziz はその手当をしにくるが、西洋人にたいして bitter になってしまっている Aziz は Ralph にたいして威丈高になる。手荒く Ralph の傷を扱って、Ralph が痛いというと、患者のくせに文句を言うのか、と Aziz はどなる。そのとき Ralph は「そんな扱い方をしないで下さい」といい、その声は「恐怖を含んでいたが弱々しい声ではなかった。」一瞬ののち、Aziz は我にかえり、握手を求めて、「わたしを不親切だとはもう思いませんか」と尋ねる。若ものは「思わない」と答える。「どうしてそれが分りますか。変な人だ。」と Aziz がいえば、「すぐ分ります。このことだけはわたしにすぐ分るのです。」と若ものは応じる。「初対面の人でも、友人か、そうでないかが分るって？」と Aziz がいえば、「そうです」と若ものは肯定する。ここで Aziz はよろこんで「それでは君は東洋人だ」という。Aziz の子供っぽい感情的な態度にたいして、Ralph のそれはもっと円熟したものであった。Aziz が「両国民は友達になれない」と言っても、Ralph は「それは知っています。」といい、「母

はあなたを愛していました。」という。彼は印度人にたいして威張らない代りに、また印度人を恐れてもいない。この感情に溺れず、てらわず、無理に逆らわない若い世代がやがては真に二つの culture の橋わたしになることを、この小説は暗示しているようである。特にヒンズー教の祭典の河渡御で、Fielding が Stella をのせてボートをこぎ、一方、Aziz が Ralph をのせてボートをこぎ、この二つのボートが転ぶくして四人が池になげ出されるところでは、その和解が暗示されているようである。

彼らが Mrs Moore の子供たちであることも意味のあることで、limitation のあるキリスト教の愛を母胎にして、より多くの適性をもった若い世代が生れた、とも言うことができよう。

以上の西洋の culture に属する人々の五つの態度にたいして、東洋の culture に属するものの態度としては Aziz のそれと、Godbole のそれ、さらに、それらの他にこの作品の背景として描かれている一般民衆の態度がある。Aziz の場合は回々教としての Aziz としてよりも、印度のインテリとしての Aziz および個人的性格としての Aziz としての要素が強く、Godbole の場合はブラーミン階級のヒンズー教徒としての要素が強く描出されている。ヒンズー教の愛の思想については松山氏の論文にくわしいから、ここでは改めて論ずる必要はなからう。

Aziz に関しては長い間の英国の統治によって培かれた印度人の対英態度の一つの型をみることができる。侮蔑にたいして非常に敏感で、誇りが強く、感情的で、愛情を求めることが強く、少しでも好意を示す英国人には過度の好意を示し、全身全霊をささげるような approach をする Aziz のテンペラメンタルな性格は個人のものとしても考えられるが、同時にまた印度人としての普遍性をももっている。

Marabar Caves の事件という conflict を通じて、この小説の登場人物の心には変化が起った。この事件が落着した後、それぞれの人物の結末と

しては Mrs Moore は自己の限界を自覚したとき、その生命も自然に絶えてしまった。Adela Quested は善意をもって印度にきたが、他人を傷つけ、自己も傷ついて帰英する。彼女は英国に帰ることが“turn to”ではなく、“return”であることを知った。しかしこの事件で彼女がどれだけ精神的に成長したか、作者は語っていない。ただ彼女も自己の限界を知ったことだけは確かである。Ronny の性格は変わっていないが、彼は結婚する相手を失った。Fielding は善意をもって行動したにも拘らず、印度にもどって来て、Aziz の拒否にあう。その原因は何かと戸まどうばかりである。彼も精神的には成長していない。むしろ彼は Anglo-Indian に近くなり、精神的には怠情になり、若い Stella や Ralph と自分との間に距離があることを感ずるばかりである。Aziz は事件前の naive な英国人にたいする信頼を失ってしまった。西は東を愛し、友人となってくれるという昔の理想主義は影をひそめて、彼は sadder, but wiser な人間となった。Godbole は事件以前の彼と変わらない。何故なれば、彼は別の次元に属する人間であり、始めから或る意味で完成された人間であり、このような事件は森羅万象の一つとして彼の眼に映るにすぎないからである。ただ一つ、将来の希望のある人間像としては、この事件のときには印度にいなかった Stella と Ralph が事件後に登場していることを重ねて注意しておく。

（わたしにはこの作品に描かれているヒンズー教の精神が真のヒンズー教の姿相であるのか、または Forster という西洋人の眼を通して見た多少歪曲されたものであるのかよく分らない。）

頁数は Penguin Books 48 による。